

宮内卿歌の歌枕についての一考察

難波宏彰

## 序

十六歳前後という若さで後鳥羽院歌壇に迎え入れられた宮内卿は、新古今時代を代表する女流歌人として、式子内親王、俊成卿女、二条院讃岐とともにその名を上げることができる。しかし、宮内卿は、他の女流歌人のように表現豊かな恋歌を詠んだわけではない。宮内卿歌の代表といえは、

うすくこき野辺のみどりの若草に跡までみゆる雪のむら消（『新古今和歌集』巻一、春上、七六）

のように絵画的で、視覚的感覚の歌である。また、宮内卿は、その斬新な感覚の持ち主として高く評価され、歌壇の盛況と共にその地位を固めていくのである。

宮内卿は、絵画的、視覚的の歌人と評されているが、彼女の作歌方法は「無名抄」（俊成卿女宮内卿兩人歌讀替事）の中で

宮内卿は始めより終まで草子・巻物とりひろげて、切燈台に火近々ともしつゝ、かつぐ書き付けく、夜も昼も怠らずなん案じける。此人はあまり歌を深く案じて病に成りて、一度は死に外れしたりき。父の禅門、「何事も身のありての上の事にこそ。かくしも病になるまでは、いかに案じ給ふぞ」と諫められけれども用るず、終に命もなくてやみにしは、そのつもりにや有りけん。

草子、巻物を広げて身の回りに持ってきてそれを取り込みながら和歌を詠むという作歌態度が説かれている。

宮内卿の周りのものを取り込みながら歌を詠むのと同様に、歌枕は、古くから多くの歌に詠み込まれ、それがもつイメージを吸収しつつ、定着していった地名である。そのため、宮内卿の作歌態度と歌枕とは類似点がある。故に宮内卿が歌枕を用いて歌を詠んだのではないかと想像することができるのである。では、宮内卿は、どのようにして古

歌を活用し歌を詠んでいったのか、ここでは、歌枕を中心に見ていくものである。

従来の宮内卿研究は、佐山濟氏<sup>注1</sup>、福田百合子氏<sup>注2</sup>、間中富士子氏<sup>注3</sup>、神尾暢子氏<sup>注4</sup>、鈴木栄子氏<sup>注5</sup>、森本元子氏<sup>注6</sup>、谷山茂氏<sup>注7</sup>、岡本あつ子氏<sup>注8</sup>、渡邊裕美子氏<sup>注9</sup>、錦仁氏<sup>注10</sup>、奥野陽子氏<sup>注11</sup>、有吉保氏<sup>注12</sup>、田中初恵氏<sup>注13</sup>の研究がある。宮内卿歌の和歌の特質として、理知、機知的、色彩性豊かな絵画美があることが指摘され、本歌取の方法と特質、歌枕、歌風等について考察されている。本稿では先学の研究に導かれつつ宮内卿歌における歌枕について考察していくものである。

○田中初恵氏の論で採り上げていない歌枕を中心とする。

## 一 宮内卿の歌枕歌

宮内卿の歌枕歌は次あげるものがある。

○正治二年（一一〇〇）十一月二十二日以降、『正治二年第二度百首和歌』（二十首） ※本文は、新編国歌大観

に拠った。

いはばしのよるの契りや思ひいづる霞にこもるかづらきの神（春、かすみ、八〇〇）

ながめやる塩路のすゑは雲消えて霞みへだつるあはぢ島山（春、かすみ、八〇一）

五月雨に玉島川の水こえて岸の岩ねぞ遠ざかりぬる（夏、さみだれ、八二三）

武蔵野や色をぞ思ふふぢばかまその紫のゆかりならねど（秋、くさはな、八二八）

すめばとてやどにはとまる心かはまづこそおもへひろ沢の月（秋、月、八二九）

まだしらぬをば捨山も月といへば心にならすさらしなの里（秋、月、八三〇）

竜田山嵐や峰にかよふらんわたらぬ水も錦たえけり（秋、もみぢ、八三五）

秋霧の立田の山をこめつればたえまにもるる色をみるかな（秋、もみぢ、八三七）

いすず川ながれ久しき御代とてや天てる神はかけをとめける（雑、神祇、八四九）

住吉の松のしづえにしらゆふの風もたむけの波やかくらん（雑、神祇、八五〇）

三輪の山とはれぬやどに神さびて幾代になりぬ杉の秋風（雑、神祇、八五二）

きぶね川滝つ岩根にちる玉ややはらげてすむ光なるらん（雑、神祇、八五三）

あさ日山まづてる峰の小松原よそにくちぬる谷の埋木（雑、ほふもん、八五四）

やとせまでいはでの杜の下紅葉ふかき心の色ぞゆかしき（雑、ほふもん、八五五）

かづらきやかかけぢのそこはかすかにて雲よりかよふ春の山ぶし（雑、やまみち、八六九）

とまりとていはぬものを月をみばふけひのうらよ名こそをしけれ（雑、かいへん、八七五）

ちる花の陰にむれるてしきしまや大和ことのはおもひおもひに（雑、あそび、八八五）

行すゑも思ひいである跡なれやみゆきふりにしみ芳の滝（雑、あそび、八八七）

大井河秋はむかしのおなじ色の心にうかぶみつのふねかな（雑、あそび、八八八）

雲のうへのをとめのすがたみるをりぞよしのの宮も面かげにたつ（雑、くじ、八九三）

○建仁元年（一一〇一）二月、老若五十首（十三首）

見わたせば冬だにかすむ住吉のとほざとをの春の此比（七番、右、一四）

なにはがた霞のまよりほのみえて浪にかげろふ春の三か月（十一番、右、二二）

そま人のとらぬまきさへながるなりにふの川瀬の五月雨の比（七十四番、右、一四八）

をしむなりゐでのわたりのさと人はかはづに春の暮をまかせて（四十九番、右、九八）

くまもなき月をばいかがみよし野のたのむのかりよよるとなくらん（百廿番、右、二四〇）

おもふさへくもらぬ夜半の詠かなをばすて山のいにしへの空（百廿四番、右勝、二四八）

竜田山みねの嵐をしぐれにて川瀬の浪も色づきにけり（百四十五番、右勝、二九〇）

からにしきあきのかたみや竜田山ちりあへぬ枝に嵐ふくなり（百五十三番、右勝、三〇六）

みしま江の玉えのあしは霜がれて風の音さへ色かはるなり（百七十番、右、三四〇）

みな月のてる日もしらずふる雪にいつもさえたるふじの山かな（二百十一番、右勝、四二二）

暮れかかるのぢの旅人わけすぎて露のみやどるすずのしの原（二百廿八番、右、四五六）

はつせ山さそふ嵐やいかならんたえだえになるいりあひのかね（二百卅六番、右、四七二）

おもひこしいなばの山のみねにしもたのめぬ松の嵐をぞきく（二百四十五番、右勝、四九〇）

○建仁元年（一一〇一）三月十六日、土御門内大臣家影供歌合（一首）

むらさきの色なりはてぬたまぞちる春雨つたふたこの浦ふぢ（雨中藤花、三番、右、八六）

○建仁元年（一一〇一）三月二十九日、新宮撰歌合（三首）

古郷のたよりおもはぬながめかな花ちる比のうつのやまごえ（六番、羈中見花、右、一一二）

数しらぬ君がよはひか神風やみもすそ川のせぜのしき浪（二十九番、寄神祇祝、右、五八）

うらみてもぬる袖かななき名のみをじまの磯の蟹ならねども（三十六番、右、七二）

○建仁元年（二二〇一）八月三日、影供歌合（二首）

都へはしぐれんころとたのためとや秋風ふきぬしら河の関（六番、関路秋風、右、四八）  
すみよしの干木のかたそぎあはずしてひさしきためし我をよにみよ（六番、久恋、右、一九二）

○建仁元年（二二〇一）八月十五日、撰歌合（二首）

心あるをじまのあまのたまかな月やどれとはぬれぬものから（十八番、海辺秋月、左勝、三五）  
あきは猶おぼつかなしや初瀬山このうれもとにのこるよの月（二十八番、古寺残月、左持、五五）

○建仁元年（二二〇一）九月十三日、和歌所影供歌合（一首）

かつまたのいけらで人と恋ひしなばむかしがたりの名をやとどめん（十九番、寄池恋、左、三八）

○建仁元年（二二〇一）十二月、仙洞五十首（十三首）

見わたせばふもとばかりにさき初めて花もおくあるみよしの山（山花未遍、一七）

へだてつる霞はよそになりはてて花にこまれるしがの山里（古郷花、三五）

むかしより植ゑけむ時を人しれぬ花にふりぬるいそのかみ寺（古寺花、四七）

行く水のそこにやどれる花の色をやがてなにおふ白河の里（河辺花、五九）

あふさかや梢の花を吹くからに嵐ぞかすむ関の杉むら（関路花、八三）

花さそふひらの山風吹きにけりこぎ行く舟の跡みゆるまで（湖上花、九四）

しなのぢや谷の梢をくもでてちらぬ花ふむきそのかけ橋（橋下花、一〇〇）

都にも月はかくこそしかあれど花をば誰かみやぎの原（月前草花、一三〇）

たへて住む人もいかでか有明の月にさびしき山のべの里（山家月、一四八）

あかで入る月をみよとや奥つかぜ煙ふきしくしほがまの浦（浦辺月、一七八）

大あらきのもりの木の間を行く月の光によらぬ下草の露（杜間月、一九〇）

玉がしはうづもれはつる難波江のものにあらはるる秋の夜の月（江上月、二〇二）

色に出でぬ思ひのみこそときは山我が身しぐれはふるかひもなし（寄雨恋、二五六）

○建仁元年（一一〇一）十二月二十八日、石清水社歌合（一首）

ふる雪はつもりにけりなあかしがた月におとせぬうらの松かぜ（『夫木和歌抄』石清水三首歌合 月前雪

七二四）

○建仁二年（一一〇二）五月二十六日、影供歌合（一首）

ほととぎすなごりはさてもおぼほえであかでいくのの暁のこゑ（十一番、暁聞郭公、右、二〇）

○建仁二年（一一〇二）九月十三日、水無瀬殿恋十五首歌合（六首）

めぐりあはん程をいつともいふべきにたよりだになしうつの山ごえ（三十五番、羈中恋、右、七〇）

契りしもあらずなりける面影はありしながらのわたりなれども（四十四番、故郷恋、右勝、八八）

いまはとてあかで出でにし曙のゐなのみなとは月ぞかはらぬ（四十六番、旅泊恋、右、九二）

たえはつる人やはつらき心から名さへうらめしあふさかの関（五十三番、関路恋、右、一〇六）  
 ともとみて伊勢をのあまにやどからん物おもふ身は袖もかわかず（五十七番、海辺恋、右、一一四）  
 あすか河契はおなじむかしにてかはる名のみやせにのこるらん（六十三番、川辺恋、左勝、一二五）

## ○千五百番歌合（二十六首）

雲ならぬ花とはたれかみかさやまかすめる空にゆきはふりつつ（春、百五十七番、左勝、三二二）  
 はなもゆきもいろはかはらじかへる雁みやこのこずゑこしのしらやま（春、百七十二番、左、三四三）  
 わぎもこがかづらきやまのはなざかりはなれぬ色のみねのしら雲（春、二百二番、左、四〇三）  
 まつがえにおきつしほかぜはるかけてかすみになぎぬたこの浦なみ（春、二百六十二番、左持、五二二）  
 けふこそあれはるはかすみのたつた山みどりをこめてすぎしもりなり（夏、三百七番、左、六一二）  
 うの花をまがきにうゑてあめの夜も月見がほなるをのさと人（夏、三百廿二、左、六四二）  
 なにはがた月にはとほくなりはてておきにただよふ夕立の雲（夏、四百五十七番、左勝、九二二）  
 見ぬ人をまつのかかげのこけむしろなほしきしまややまとなでしこ（夏、四百八十七番、左勝、九七二）  
 かたえさすおふのうらなしはつあきになりもならずも風ぞ身にしむ（夏、五百二番、左勝、一〇〇二）  
 みやぎのや野ばらのとをかりころもかぜにまかするはぎが花ずり（秋、五百七十七番、左持、一一五二）  
 雲かかるとこまたかねに月おちてみわのひばらにましらなくなり（秋、六百八十二番、左、一三六二）  
 つのくにやながらへもせであきはけふいくたのおくに風ぞはげしき（秋、八百十七番、左、一六三二）  
 竜田山このしたぶしのあとにのみあらしにのこるもみぢなりけり（冬、八百七十七番、左持、一七五二）



つのくにのなにぞはあしのあるかひは風もあらはにやどはなりつつ（冬、八百九十二番、左、一七八二）  
 ほともなくかぜのけしきもあらちやまみねよりわけてつもるしらゆき（冬、九百卅七番、左勝、一八七二）  
 きのくにやあまのふせやのとまびさしふきあげのちどり月になくなり（冬、九百六十七番、左持、一九三二）  
 さゆる夜もおとこそたえねいはが上にちるたまこほるみよしののたき（冬、九百八十二番、左持、一九六二）  
 見わたせばこほりのうへに月さえてあらなみよるまのの浦風（冬、九百九十七番、左持、一九九二）  
 みやぎのやはぎのふるえにしもさえてこのしたつゆはたるひなりけり（冬、千十二番、左、二〇二二）  
 おのがさとの山かぜさえてふくからにみやこへいづるをののすみやき（冬、千廿七番、左勝、二〇五二）  
 ややわかめかりそめぶしのそでのうへにけふとしなみもこゆるぎのいそ（冬、千四十二番、左、二〇八二）  
 ちよまでとよはこのほりにことよせてちぎりをむすぶしがのうらなみ（祝、千百十七番、左持、二二〇二）  
 つのくにのみつとないひそやましろのとはぬつらさは身にあまるとも（恋、千三百十二番、左、二六二二）  
 中中にながめにぬれぬしづがきるたみののしまのあめのゆふぐれ（雑、千四百二番、左持、二八〇四）  
 もののふのやそうぢがはのはしばしらのどかにおとせまきのしま船（雑、千四百四十七番、左勝、二八九四）  
 身のうさをかくてもやみになしはつなあふぐ心をみくまのの月（雑、千四百九十二番、左持、二九八四）

○建仁三年（一一〇三）六月十六日、和歌所影供歌合（一首）

いかだしの跡をたづねて大井河はや瀬におつるなつのよの月（十番、水路夏月、左勝、五五）

○続後拾遺和歌集（一首）

住吉の松にしら雪ふるからに声よわりぬる興つしほ風（卷六、冬歌、四八八）

○古今著聞集（一首）

都にも有りけるものをさらしなやはるかにききしをばすての山（卷五、宮内卿男疎遠の時詠歌の事、一三五）

正治二年第二度百首和歌（二十首）

老若五十首（十三首）

土御門内大臣家影供歌合（一首）

新宮撰歌合（三首）

影供歌合（二首）

撰歌合（二首）

和歌所影供歌合（一首）

仙洞五十首（十三首）

石清水社歌合（一首）

影供歌合（一首）

水無瀬殿恋十五首歌合（六首）

千五百番歌合（二十六首）

和歌所影供歌合（一首）

## 続拾遺和歌集(一首)

## 古今著聞集(一首)

以上、九十二首宮内卿の歌枕歌がある。歌枕の使用状況については、次の表に上げておいた。

## 宮内卿歌における歌枕の使用状況

あかしがた(播磨)	1	あさひ山(山城)	1	飛鳥川(武蔵)	1
淡路しま山(淡路)	1	あふさか(近江)	2	あらち山(越前)	1
いく田(摂津)	1	いくの(丹波)	1	いこま(大和)	1
五十鈴川(伊勢)	1	伊勢(伊勢)	1	いそのかみ寺(大和)	1
いなばの山(美濃)	1	いはでの森(山城)	1	いはばし(山城)	1
うつの山(駿河)	2	おふのうら(伊勢)	1	大荒木の森(山城)	1
大井川(山城)	2	かつまたのいけ(大和)	1	かづらき(大和)	3
木曾(信濃)	1	きのくに(紀伊)	1	貴船川(山城)	1
こしのしら山(越前)	1	越るきのいそ(相模)	1	さらしな(信濃)	2
しがのうら(近江)	1	滋賀の山里(近江)	1	しきしま(大和)	2
信濃路(信濃)	1	しのはら(近江)	1	塩かまの浦(陸奥)	1
白河の里(山城)	1	しら河の関(陸奥)	1	住吉(摂津)	4

たこの浦 (越中)	1	たこの浦 (駿河)	1	立田山 (大和)	6
玉島河 (筑紫)	1	たみのゝ島 (摂津)	1	つのかくに (摂津)	3
ときは山 (山城)	1	とほざとをの (摂津)	1	ながら (近江)	1
なには (摂津)	3	丹生の河原 (大和)	1	のち (近江)	1
はつせ山 (大和)	2	ひらの山 (近江)	1	ひろ沢 (山城)	1
ふきあげ (紀伊)	1	ふけひの浦 (和泉)	1	ふじの山 (駿河)	1
まきのしま (山城)	1	まのの浦 (近江)	1	みかさ山 (大和)	1
みくまの (紀伊)	1	みしまえ (摂津)	1	みもすそ川 (伊勢)	1
みやぎの (陸奥)	3	みよしの (大和)	5	みわの山 (大和)	2
武蔵野 (武蔵)	1	やそうぢがわ (山城)	1	やまのべのさと (大和)	1
るで (山城)	1	るなのみなと (播磨)	1	をじま (陸奥)	2
をののさと (山城)	2	姨捨山 (信濃)	2		

「宮内卿歌における歌枕の使用状況」を示した。その分布状況は、ほぼ均等に使用されている。ただ、立田山(六例)、住吉(四例)、みやぎの(三例)、また、吉野(六例)と古くより定着し、豊かな先行歌を持つ歌枕については、数量的に多くなっており、宮内卿の作歌態度として上げられる「本歌取り」を裏付けるものとなっている。以下、宮内卿の歌枕を考察していきたい。

## 二 「古歌伝統」の踏襲

歌枕は、古くから多くの歌に詠み込まれ、それがもつイメージが定着した地名である。そのため歌枕のもつ形、構図、イメージが歌に影響を与えるのである。宮内卿は、『無名抄』に記されているように、「始めより終まで、草子・巻物とりひろげて、切燈台に火近々ともしつゝ、かつぐ書付けく、夜も昼も怠らずなん案じける」と歌を詠んでいた。そうした、歌枕を発想とした本歌取や、古歌の伝統を踏襲し詠んだ歌は少なからず存在する。

## ① 姨捨・さらしな

まだしらぬをば捨山も月といへば心にならすさらしなの里（正治二年第二度百首、八三〇）  
 都にも有けるものをさらしなやはるかにきしをばすての山（古今著聞集、二三五）

## （参考歌）

わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て（古今集、巻十七、雑歌上、八七八、よみ人しらず）  
 名に高き姨捨山を見しかども今夜ばかりの月はなかりき（詞花集、巻九、雑上、二八八、藤原為実）

さらしなや姨捨山に月みるとみやこにたれかわれをしるらん（久安百首、四九三、前備後守季通朝臣）

宮内卿歌に登場してくる、「姨捨」「さらしな」は、信濃のみならず東国における最古、最大の歌枕である。宮内卿歌も参考歌同様に「姨捨」「さらしな」と二つの歌枕が詠まれている。また、これら二つの歌枕は関連ずけて詠まれることが多かったのは、周知のとおりであり、「姨捨山」の「月」も古くから民衆にあった月の信仰などもあいまって和歌に詠み込まれるようになったものである。

それを、参考歌であげた。『古今集』（八七八）、『詞花集』（二八八）、『久安百首』（四九三）、のように伝統性を有

する前代歌を参考にして宮内卿歌は詠まれている。宮内卿歌は、参考歌の伝統を踏襲しているほか、歌の内容も心なぐさまぬことを歌に詠み、また、姨捨山の「月」を歌に詠み込んでいる。伝統を踏襲しただけで、参考歌から発想が抜け出せていない歌になっている。

## ②白河関

都へはしぐれんころとたのためとや秋風ふきぬしら河の関（建仁三年八月三日、影供歌合、四八）

### （本歌）

みやこをばかすみとともにたちしかど秋風ぞふくしらかはのせき（後拾遺集、卷九、羈旅、五一八、能因法師）  
この宮内卿歌は、「みやこ」（「かすみ」・「しぐれ」）「秋風」そして「白河関」と本歌の語句、そして、その語句のみならずその置き所まで一致している語句構成をもっており、型の上からも本歌に大きく依存している。ただ、陸奥から都へという本歌とは逆行の過程をたどるものになっている。

## ③八十字治川

もののふのやそうちがはのはしばしらのどかにおとせまきのしま船（千五百番歌合、二八九四）

### （参考歌）

うぢがはのかはせも見えぬゆふぎりにまきのしま人ふねよばふなり（金葉集、卷三、秋、二四〇、藤原基光）  
かずならぬ身をうぢがはのはしばしといはれながらもこひわたるかな（金葉集、卷八、恋下、五〇九、源雅光）

### （影響歌）

ちはやぶるやそうちがはのはしばしらいぎよふなみのいく世かへらん（為家千首、八九〇）

これは、参考歌、『金葉集』（二四〇、五〇九）歌の「秋」や「恋」という歌の心はとりいれず、参考歌より詞の撰

取、配置を取り入れた歌になっている。また、影響歌の為家歌「ちはやぶる…」の歌は、この宮内卿歌の影響をうけたと思われる。「のどかにおとせまきのしま船」を「いざよふなみのいく世かへらん」と換えて詠んでいるが、宮内卿歌の方が、「まきのしま船」を詠み込むことにより、影響歌より、より写生的、絵画的になっている。

このように、宮内卿の歌枕詠には、「姨捨・さらしな」にみられた古歌の伝統に拠り、そこから抜け出られない歌も存在している。しかし、古歌に拠るだけではなく宮内卿は、「白河関」のように、本歌に依存しつつそれは逆の構図を用いたり。「八十字治川」のように、そこから宮内卿独自「絵画性」や「感覚美」を求めようとしているものも存在していたのである。

### 三 歌枕にみる色

#### ① たこの浦

むらさきの色なりはてぬたまぞちる春雨つたふたこの浦ふぢ（建仁元年三月十六日、土御門内大臣家影供歌

合、八六）

#### （参考歌）

ふぢなみの かげなすうみの そこきよみ しづくいしをも たまとぞわがみる（万葉集、卷十九、四一九九）  
たこのうらの そこさへにほふ ふぢなみを かざしてゆかむ みぬひとのため（万葉集、卷十九、四二〇〇）

この歌は、色彩豊かな自然詠である。参考歌の『万葉集』（四一九九、四二〇〇）と同様に「たこの浦」「藤」の構図は同じものの「紫」の色を歌の初句で用いることで、歌の中での「むらさき」が強調されている。雨に濡れる淡い紫を一層際立たせ、紫色の春雨のふるたこの浦の情景と「むらさき」色の「春雨」のつたうたこの浦に咲く「ふじ

の花」の情景をみごとに表現している。また、一貫して紫を貫く宮内卿の激しさも見てとれ参考歌のような淡い情景歌とは違い、造形的なものとさえ感じさせる。

### ② たごの浦

まつがえにおきつしほかぜはるかけてかすみになぎぬたごの浦なみ（千五百番歌合、五二二）

#### （参考歌）

わが恋をしらんと思はば田子の浦にたつらん波のかずをかぞへよ（後撰集、卷十、恋二、六三〇、藤原興風）

田子の浦に霞の深く見ゆるかなもしほの煙たちやそふらん（拾遺集、卷十六、雑春、一〇一八、よしのぶ）

これは、参考歌であげた『後撰集』（六三〇）、『拾遺集』（一〇一八）の影響を受けたものである。

従来、田子の浦といえは、

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ富士の高嶺に雪は降りつつ（万葉集、卷三、三一八）

いつとなく心そらなるわが恋や富士の高嶺にかかる白雲（後拾遺集、卷き十四、恋四、八二五、相模）

などのように富士は、白という古歌の伝統がある中で、「霞」、「たごのうら波」の白を一層際立たせその中に「松」の緑を配色し、白と緑のすばらしいコントラストを表現したものとなっている。参考歌にとらわれない美しい自然詠となっており「たごの浦」の紫と同様造形的な歌になっている。

### ③ 住吉

住吉の松のしづえにしらゆふの風もたむけの波やかくらん（正治二年第二度百首和歌、八五〇）

見わたせば冬だにかすむ住吉のとほざとをの春の此比（老若五十首、一四）

すみよしの千木のかたそぎあはずしてひさしきためし我をよにみよ（建仁元年八月三日、影供歌合、一九二）



住吉の松にしら雪ふるからに声よわりぬる興つしほ風（統後拾遺和歌集、四八八）

（参考歌）

住吉の岸の松が根うち曝し寄せ来る波の音のさやけさ（万葉集、巻七、一一五九）

住吉の松にたちよる白浪のかへるをりにやねはなかるらむ（後撰集、巻十、恋二、六六一、壬生忠岑）

住吉の遠里小野に来てみれば真萩が枝に花さきにけり（拾玉集、二三七、慈円）

我見てもひさしく成りぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ（古今集、巻十七、雑上、九〇五、よみ人しらず）

住吉の岸のひめ松人ならばいく世かへしとはましものを（古今集、巻十七、雑上、九〇六、よみ人しらず）

宮内卿歌の「住吉」四首は、「松」が波に洗われる様子。「住吉のとほざとをの」の情景。「千歳の松」の概念を踏まえたもの。そして、「松」「白雪」「潮」の情景を詠んだものとなっている。それぞれ、参考歌であげたようなものがある。正治二年二度百首、八五〇の歌は、『万葉集』（一一五九）、『後撰集』（六六一）の歌を踏まえて、松と波の歌材を用いて詠まれているが、『万葉集』と比べ、宮内卿歌は、「しらふゆの風」と歌に詠み込むことにより、松の緑と「しらふゆ」の風、波の白さが一層際だつものとなっている。老若五十首、一四の歌は、「住吉のとほざとをの」を詠んだものである。「遠里小野」は、参考歌『拾玉集』（二二三）であげたように、「萩」とともに詠まれることが定着していたようである。また、その連想から「月」などの歌材も多く詠まれていたのであるが、ここでは、その構図はとらずに、珍しい構図を用いている。そこには「冬」「春」の景物を詠み込むことなく、抽象的に「冬」「春」を用いている。いはば漠然とした冬の色、春の色を詠み込みその色の対比を楽しむ詠みぶりになっており、大変色彩豊かなものとなっている。

建仁元年八月三日影具歌合、一九二の歌は、参考歌『古今集』（九〇五、九〇六）の歌のような、「千歳の松」の観念

の影響を受けた詠みぶりになっている。また、『統後拾遺和歌集』（四八八）の歌は、『万葉集』（一一五九）、『後撰集』（六六一）を踏まえ松、波を歌材に歌を詠んでいる。しかし、その中に「しら雪」を織り交ぜることにより、松の緑と、白雪、そして潮風と色彩豊かに表現し、「白」と「緑」という色彩を見事に表現している。この「住吉」の他に、「初瀬山」「逢坂」「難波潟」「宇津山」など数多くの歌枕があり、またそれらには、豊かな先行歌があるにも関わらず、「住吉」に四例と他の歌枕と異なり宮内卿が多くの歌を詠んだのは、松の緑、波の白といった色彩の対比が古歌の伝統の中で培われきた歌枕であることが考えられる。しかし、「見わたせば冬だにかすむ…」の歌の中で用いた冬、春の抽象的な色の対比は、伝統に縛られた「住吉」の歌枕に斬新な歌を詠み込もうとした宮内卿の色彩豊かな側面もこの「住吉」から見て取れるのである。

このように宮内卿の歌枕歌には、古歌の伝統をふまえながらも発想を換え造形的色彩を引き出す知的な面を持っていると考えられる。

#### 四 「新しい素材」

##### ① しがの山里

へだてつる霞はよそになりはてて花にこもれるしがの山里（仙洞五十首、三五）

「志賀」は、天智天皇の天津の宮が営まれた所であり、柿本人麻呂の

ささなみの

しがのへ二云、ひらのくおほわだ

よどむとも

むかしのひとに

またもあはめやもへ二三、あはむとも

へや

(万葉集、卷一、三二)

が有名であるが、鎌倉期になって桜とともに詠まれるようになった歌枕である。宮内卿は、その志賀を「霞」と「花」を歌材として歌に詠み、「霞」と「花」とを見立てて白の色彩美を用いて、桜にかこまれている古から続く志賀の山里を表現している。

また、志賀は「志賀の都」「志賀の里」「志賀山」「志賀の浦」と表現されて歌に詠まれてきたが、「しがの山里」と表現されることはなかったようで、中世になって

あれにける志賀の山里冬くればとほもわかぬ雪のはなぞの (夫木和歌抄、七三四三、藤原為家)

ゆきてみむ昔ながらにさくら花をりにあふ身のしがの山里 (拾玉集、二二六〇、慈円)

【】ちりなむのちはみやこ人こひしかるべきしがの山里 (洞院撰政家百首、一八二、藤原教実)

の三首が見えるのみで、他に見ることができないものである。このように宮内卿は、昔から伝統的歌枕の表現技法を踏襲しつつも詞を変えて新しい表現を用いたことになる。

②みくまの

身のうさをかくてもやみになしはつなあふぐ心をみくまの月 (千五百番歌合、二九八四)

「み熊野」は、柿本人麻呂

みくまのの うらのはまゆふ ももへなす こころはおもへど ただにあはぬかも (万葉集、卷四、四九六、

のように浜木綿が有名である。この影響を受け、平安以降、

わするなよわするるときかばみくまののうらのはまゆふうらみかさねん（後拾遺集、卷十五、雑一、八八五、

道命法師）

み熊野と浜は、結びつけて詠まれるようになりそれが固定化されたのであった。しかし、宮内卿は、単にみ熊野を詠み「みくまの月」と「月」を歌材に詠んでいる。これは、『玉葉集』（卷二十、神祇歌、後白河院、二七八二、二七八三）

熊野御幸第卅二度の時、御前にて

おぼしめしつづけさせ給うける

わするなよ雲は都をへだつともなれてひさしきみくまの月

御返し、かんなぎに託宣せさせ給

ける

しばしばもいかがわすれん君をまもる心くもらずみくまの月

と鎌倉以降詠まれるようになったもので、伝統の古歌を踏まえた歌枕とは、構図もイメージも異にする極めて新しい物である。こうした新しい素材もいち早く取り入れ、宮内卿は歌に詠んでいるのである。

結

以上、宮内卿の歌枕について見てきたが、歌枕という伝統を踏まえた歌語の中で、宮内卿は、歌枕の伝統に従い、

それにしたがって詠んだ歌も少なくはなかったのである。しかし、歌枕の中に色彩を表現した歌では、古歌の伝統、そして、その言葉の持つイメージは踏襲しつつも、そこに宮内卿独自の造形的、人工的な彩色を用いて、歌の構図を形成した斬新な歌がみられた。また、古歌の踏襲だけではなく、歌枕の中から、他の歌材と併せることにより、新しい歌語を見つけだそうという斬新な一面もかいまみることでもできたのである。新古今時代という、和歌文学隆盛の中で、伝統に縛られつつも、何か新しいことを見つけだし、新しい和歌の方向性を見つけだそうとした、「夜も昼も怠らずなん案じ」る姿が、そこに見て取れるのである。

## 注

- (1) 佐山濟氏「宮内卿と俊成女」(『日本女流文学評論』越後屋書房、昭和十八年五月)
- (2) 福田百合子氏「宮内卿」(『日本歌人講座中世の歌人』弘文堂、昭和四三年十二月三十日)
- (3) 間中富士子氏「新古今入集の当代女流歌人の歌」(『国文鶴見』4、昭和四四年三月)
- (4) 神尾暢子氏「纂輯後鳥羽院宮内卿歌集稿」(『王朝』第三冊、王朝文学協会、中央図書出版社、昭和四五年十月)「纂輯後鳥羽院宮内卿歌集稿補遺」(『王朝』第四冊、王朝文学協会、中央図書出版社、昭和四六年八月)に依り宮内卿歌は、現在のところ三百六十四首とした。
- (5) 鈴木栄子氏「後鳥羽院宮内卿の特異性」(『日本文学の伝統と歴史』臼田甚五郎博士還暦記念論文集委員会、桜楓社、昭和五十年一月)
- (6) 森本元子氏「千五百番歌合と女流(一)(二)」(『相模女子大学紀要』40・41、昭和五一年二月・五二年二月)
- (7) 谷山 茂氏『谷山茂著作集五 新古今集とその歌人』(角川書店・昭和五八年十二月)
- (8) 岡本あつ子氏「宮内卿の歌風」(『日本文芸研究』36・4、昭和五九年二月)
- (9) 渡邊裕美子氏「俊成卿女と宮内卿——『千五百番歌合』本歌取作をめぐる——」(『文学研究科紀要別冊 16集 文学・芸術学編』平成二年十二月)

- (10) 錦仁氏「女流歌人群」(『和歌文学講座6 新古今集』所収、勉誠社、平成六年一月)
- (11) 奥野陽子氏「若草の宮内卿 風を見る心」(『女と愛と文学——日本文学の中の女性像——』所収、世界思想社、平成六年一月)
- (12) 有吉 保氏「女流歌人宮内卿——新古今の彗星——」(『新古今和歌集の研究統編』所収、笠間書院、平成八年三月)
- (13) 田中初恵氏「宮内卿の和歌についての覚書」(『和歌文学の伝統』所収、角川書店、平成九年八月)